

昭和47年6月15日発行・第31号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

6月号



Le Libertaire VoL, III, No7

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年 九月 四日第三種郵便物認可
昭和四十七年六月十五日発行第三十一号

定価一〇〇円(送料共)

目次

労働と権力	志賀口雄之介	1
大石誠之助と「家庭破壊論」	小川武敏	6
岩佐作太郎の擁護	布留川信	10
戦後の思い出	杉藤二郎	15
テルアビブ空港事件	三浦精一	18
野火		

労働と権力

志賀口雄之介

(1)

権力の本質は、情報の集中管理である。言論統制などは、重要な、その本質にかかわる作業ではあるが、ほんの一面のあらわれにすぎない。メディアはさまざまであるが、権力はあらゆる情報・バターの操作決定あるいは情報・バターそのもののレイアウトをする。あるものとして機能している。権力は、情報・バターの関数（ファンクション）である。

政治権力は、行政組織、軍事組織など、いわゆる「組織」、人間という情報、ないし情報の原単位「配置」、統合を目的とし、メディアともしている。詔勅、法律、通達は、その情報・バターの流れる（生かしている）情報である。

経済権力とは、金（という情報）の流れの操作である。金を情報とした人間組織、人間を情報の原単位とするならもともと基礎的な、原情報・バターともいべきものの、その管理、操作決定、つまり運営経営であろう。人間（という情報）を、物理的に支配するのは右の二つ。（愛・セックスについては、全く別次元の問題とな

ろう）。権力の強大さは、その管理する情報・バターの質と量に比例する。バターそのもののひろがり（仮に）深さが権力の及ぶ範囲を規定する。人間という情報の管理がその目的であり、すべての人間、つまりすべての情報の操作が権力の理想であろう。

その場合、人間がタダの、いかえれば、物体としてあるのみの人間、形だけ人間である人間では、権力にとっては意味がない。その人間は原情報としての人間、情報単位としての人間でなければならない。つまり、狂人白痴は権力には意味はない。権力はそれ自体、情報であり、情報・バターであり、その維持のため、情報を求めバターの拡大をはかっている。

人間が、情報単位であるということは、別のいい方をすれば「労働」しているということだ。労働は何よりもまず情報を生み出す。生産物（商品）を「情報」とみなすことには、常識から発する反撥があるが、労働している人間がいるというそれだけで、権力には貴重な情報であることは、常識からもうなすけることであろう。こ

これは直ちに、社会（国家・経済）という情報・パターンにくみこまれる一条の情報なのだ。国家や会社は、何もひとつひとつの人間の労働の結果である生産物を管理しているわけではない。その情報を情報として管理操作しているのだ。もうひとつ、組織（パターン、システム）の維持も、人間の労働の結果である。パターン維持の労働は、明らかに情報活動であり、人間はそのとき、情報単位である。メディアとして、テレビにおける電気、印刷物における文字として機能しているのだ。

人間の労働と、情報を操作管理するものと、情報そのものを生み出すものに分類できるかもしれない。（情報を生み出すために、別の情報を蒐集操作、管理する必要があるのは当然として）。権力はその両様の情報活動の統合体であり、この統合を目的とするものといえよう。つまり、権力は、労働に始まり、労働に終わる。労働がなければ、権力もない。第一、権力の行使自体、かなりの労働ではないか。戦争をみよ。国家とは、労働の集合体である。つまり政治とは、人間を情報単位としたコミュニケーションと定議できよう。（この政治にはガバメントのほかマネージメントも含意される。つまり広い意味の政治）。とするなら、権力とは、その情報及びその集合・統合体である情報・パターンの操作である。情報

に価値を与えようとした。『百姓は国のもとい』などに
5。

この、いうところの搾取階級への最大の打撃は『怠惰の筈であるが、奇妙なことに、労働階級の国家奪取、権力掌握という方向が与えられ、当然、労働及び労働者階級の“聖化”が行なわれた。まず、観念の上で。そして事実の、国家というパターンの配置の上で行なわれたことに、少なくとも、タラマエとしては、なっている。しかし、誰が何といおうと、また労働階級の国家内の位置がどうあるうと、労働そのものの“呪わしさ”に変わりがあるうか？ シモーヌ・ヴェイユは自らの労働体験を経た上で、変りないと断じた。正にそのとおりで労働の本質、本来的な呪い、罪と罰性（？）は、権力の所在位置と何の関係もない。

革命は、国家権力の場で生じたかもしれないが、労働においては起らなかった。搾取階級の“偏見”を、そっくり労働階級がうけついただけの話である。何が生れたか？ より強大な権力である。人間の根本的条件は量的にはともかく、本質的には変らなかつた。より広い高度な情報・パターンを持つ階層が、単純な狭い、旧式のシステムにとってかわつただけだ。白人娘と結婚した黒人エリート男性の幸福というものにそれは似ている。

化した労働の管理だ。自己の些少な労力をもって、膨大な労力の所産を操作するのが権力である。それは一種の“増巾器”といえる。人間一箇の力などしれている。これが途方もない妖怪になるのは、その増巾器ゆえである。歴史上のあるとき、そのために人間は、マンモスを打ち倒し食糧を得た。しかし、今や、これは人間それ自体を打ち倒す妖怪になってしまっている。人間が自由となるべき武器が逆に人間から自由を奪う凶器になっているのだ。

(2)

そもそも、労働自体、自然に対する管理、管理という以上、情報化であり、人間の権力行使ではないか？ それを罪悪、少なくとも悲しい人間の業（ごう）とみただけは仏である。旧約聖書においては、それは罰として神から人間にくだされた判決である。これは東西両洋の自然観の根源の相違を生み出したものとして興味あるが、いづれにせよ、労働を根源的な“呪”として見ていることにはかわりはない。労働は人間にとっての、いとうべき宿命的な災厄であった。

しかし、すべての権力は労働自体を価値あること、ほむべきこととするために、全力あげて“教宣活動”をしてきた。まず、他人の労働によって生活する階層が労働

(3)

新しい地平を展望できる位置は、つねに“偏見”である。“公正な見解”は、既成の情報・パターンの枠内での妥当な操作、つまりトリートロジにすぎないのにひきかえ、偏見は情報・パターンそのものを任意の曲率で歪め、それはパターンの枠組みそのものの変更を要求する。情報の新しいパターンの要求、つまりエネルギーの発現である。偏見はつねに装飾された情報である。新しい思想（情報・パターンの一箇）の準備である。

しかし、その偏見が、すでに枯死——つまり新しいパターンへの組みかえを要求する力を失っている場合もあるが、これはあらゆる情報・パターンないし、パターンそのものに共通する老化であって、偏見そのものの有効性を否定するものではない。

偏見は美しくはないか。白人娘の驕慢は美しくさえある。だからこそ、白人の娘は黒人によって犯されねばならない。芸術家の倨傲も同じい。いや、美と偏見はそれ——一定の曲率を帯びた情報・パターンのことではないのか。

ともあれ、偏見もまた組みかえを要求される。新しい偏見によって、だ。

偏見はつねに価値の問題である。現在、価値を与えら

れているもの、その全てが偏見の所産ともいえる。労働及び労働者についての価値判断、つまり偏見も同様である。必要であるということ、尊いということとは別である。必要であるということは、自由の侵害であり、むしろいとうべきことだ。労働者がなぜ尊いのか。勤者が、なぜ新しいパターンの曲率の決定者でなければならぬのか。

労働は前述したとおり、搾取される対象であると同時に、搾取する機能でもある。労働者は搾取の主体でもある。行政とは労働ではないのか。官僚の、忠誠優良なる臣民の勤勉なる労働の集合ではないか。権力というフィクションを世界化現実化するのが労働だ。労働は権力の客体でもあるが、主体でもある。つまり、労働は権力の即自存在だ。労働がなければ、労働者がいなければ権力も消滅する。この労働の二重性を無視してはなるまい。「財産とは窃盗だ」という指摘をなぞらえば、労働は未必の故意による(?)毒殺だ。少くとも、窃盗の教唆煽動だ。被害者は人間、被害物は「自由」。「労働者万歳」という「偏見」からわれわれは解放されるべきだ。

現在の、会社のためならどんな大義(情報パターン)でも売れない労働者、国のためにどんな、だれの自由をも犠牲にしてかえりみない労働者について多言は費

すまい。思い出せばよい。権力の管理下パターン内にある労働者(と労働)は根本的に腐敗している。しかし、これは労働のもつ二重性の当然のあらわれであろう。労働と労働者こそ、権力の源泉なのだ。人間は、労働からこそ自由でなければならぬ。人間の根元的条件——労働からの解放こそ真の自由の源泉となろう。すなわち、

アナキストは怠惰遊行の徒であるべきなのだ。少くともあらゆる行為において、ノン・プロフェッショナル、アマチュアであるべきだろう。

イエス・キリストはいつたそうだ。「野の花をみよ、空ゆく鳥をみよ。耕やさず、紡がず、しかして生く」と。また、釈迦は四門より出、老病死苦の姿を見た。苦とは労働する人の姿である。二人の「人間は労働者であってはならない」という「偏見」を重んずるべきだ。莊子は自らを泥中の亀にたとえ、ソローはたまさか、エンピツを作ったのいだ。人間は特に会社員。国民などでなくとも生きてゆけるのだ。

(4) 反論は、労働なしに人類が生存できるかという点であろう。その点については、現在では可能だと思ふ。科学が発達してなくなるのは宗教でなくて、労働であるべきなのだ。けだし、科学と宗教は別次元の問題だが、科学

と労働は同一次元の問題だからだ。だから宗教は労働を解決はできなかったわけだ。あきらめただけに終わった。

もっとも、科学をそのために権力奉仕から人間の自由奉仕へ組みかえるための労働は必要ではあるが。

この詳説は、ユートピアの設計図の作成になるであろう。由来、日本にはユートピア思想がないといつてもいいのだから、ひとつ位あつてもいい。やつてもよい。しかし、このユートピアなるものが、権力主義者の途方もない妄想であることが多い。だからやめておくとして、働きたければ勝手に働け、ひとに勤務精励を押しつけるな、そんなに労働が尊く楽しいことなら好きにやればよい。というステレオタイプでそれに代えておく。

労働を前提とし、すべての構成メンバーが労働者であるユートピアなど全くナンセンスだと思ふ。真のユートピアに労働はあつてはならない。あれば、すべてが権力の幻影と化すであろう。

(5)

多くのアナキスト、ユートピアンは、労働に対する「偏見」から脱れ得なかつた。その時代としてはそれも意味があつたのであろう。「労働者を如何に救うか」という時代の潮流の中の思考でそれはあつた。労働者は今や変質した。このアイデアの生産性、偏見のエネルギーは

消滅した。われわれは、新しい「偏見」をもって、労働そのものに対するべきである。

サロン・リベルテール

毎週火曜日六時三〇分から
中央線水道橋駅東南口 喫茶「終着駅」で
(ウニタへ行く道 右側二番目の横丁に入る)

アナキストのサロン。討論会、おしゃべり……内容は特に決めません。その時集まった人たちの組み合わせやふんいきによって決定されます。コーヒーを飲むためにきていいし、みんなが討論のテーマなどを持ってくればなお面白いと思います。